

2. 方法としての聞き取り

橋本 明

愛知県立大学

最初に「方法としての聞き取り」というタイトルの意味を説明したい。それは、「聞き取り」とはあくまで方法であって、聞き取ること自体が目的ではないということである。筆者の専門にひきつけられれば、精神医療の歴史を明らかにするために、「聞き取り」も一つの方法としては使える、ということに過ぎない。したがって、「聞き取り」の重要性を必要以上に強調するつもりはないし、標準化され、洗練された「聞き取り」の方法や技術を確立することにはこだわらない。逆に、もし方法や技術として確立した、いわばマニュアル化された「聞き取り」というものがあって、それによってこの世界を切り取るようなことになったとすれば、それは本末転倒である。文献資料では捉えることができない、不安定な現実を柔軟に臨機応変に切り取る、つまりおおよそマニュアル化には馴染まないのが「聞き取り」という方法の醍醐味と考えるからである。

さて、「方法としての聞き取り」というタイトルにはもうひとつの意味が込められている。実は、精神医学者・土居健郎の『方法としての面接』（医学書院、1977年）をもじっている。この本は精神科面接の勘どころなどを簡潔にまとめたものだが、巻頭でドイツの文豪ゲーテの言葉“Sich mitzuteilen ist Natur; Mitgeteiltes aufzunehmen, wie es gegeben wird, ist Bildung.”を引用している。訳せば「自分のことを話すのは自然である。一方、話されたことを、話されたとおりに受け取るのは、教養である」となる。話し手の意図や気持ちをどれだけ正確に把握できるのか、それには聞き手の教養とか教育がかかっているということである。精神医療史の「聞き取り」でも似たことが言えるのではなからうか。既に述べたように、たし

かに「聞き取り」の方法や技術を、アカデミズムのフィルターをとおして標準化することは、「聞き取り」の本来のよさを棄ててしまうことになるだろう。しかし、何の方法も技術も経験も知識なく、「聞き取り」を行うことはできない。やはり話し手の意図を正しく理解するためには、(もちろん小手先の方法や技術ではない) なんらかのBildung, つまり教養とか教育、言い換えれば「聞き取り」というものについての一定の認識が聞き手に備わっていることが必要だろう。そこで、以下では筆者の経験にもとづいて、「聞き取り」というものをどう考えたらいいいのか、すなわち「聞き取り」の認識に関わる点について検討したい。

まずは歴史研究における「聞き取り」の位置を確認する。筆者の専門である精神医療の歴史研究のうち、精神医学に関わる学説史、人物誌、制度史、患者の動向や治療の歴史といったものの多くは、過去に刊行された書籍や論文、行政の統計資料や文書、国立・公立・私立病院の入院患者のカルテなどの一次的な資料といった、純粋に文字記録データをもとに構築されてきたものだろう。

しかし、筆者が見るところ、日本の精神医療史研究には「聞き取り」の伝統がある。言い換えると、精神医療の歴史研究のある部分は、間違いなく「聞き取り」をもとに作られてきた。それは、オーラル・ヒストリーなどという言葉が日本に導入されるよりずっと以前からである。いずれも記録としては残りにくいもの、たとえば、神社仏閣での伝統的な治療や、病院や自宅を含めた患者監置の実際の様子に関わるものがそれに該当する。代表的なものに東京帝国大学の精神病学教授、呉秀三の1912年の論文「我邦ニ於ケル精神病ニ関

スル最近ノ施設」(東京医学会事務所)がある。これを知っている人は、「これがなぜ聞き取りなのか」と思うかもしれない。論文で扱っているのは、タイトルが示す通り、当時存在した精神病治療に関わる大学の病院や公立および私立の病院、神社仏閣などすべての施設である。そのうちのいくつかは、明らかに文献からだけでは知りえない情報を含んでいる。とくに私立の精神病院や神社仏閣の記述に顕著である。呉秀三自身というよりも、おもに彼の弟子たちが集めた情報かもしれないが、いずれにしても論文記述の背後には、数多くの「聞き取り」があったことが伺われる。さらに、呉秀三と榎田五郎の1918年の論文「精神病者私宅監置ノ実況及び其統計的観察」(『東京医学会雑誌』第32巻)も、「聞き取り」なしには成立しえなかったものである。時代が下って、1963年の小林靖彦の『日本精神医学小史』(中外医学社)も、彼が日本各地を巡り、現地で取材をした結果がふんだんに活用されている。小林以降も、「聞き取り」にもとづく論文や著書は少なからず出されて続けているが、ここでは割愛したい。

ところで、上でオーラル・ヒストリーについて言及した。「オーラル・ヒストリー」と「聞き取り」との違いはあるが、「口述の史料は記録文書の下位」にあるという認識のもと、両者とも学術的方法論の傍流と位置づけられてきたのではあるまいか。それに対して、オーラル・ヒストリー研究で知られるポール・トンプソンは、『記憶から歴史へ』(酒井順子訳、青木書店、2002年)のなかで、これまで虐げられてきたという口述史料の正当性と有用性を主張している。オーラル・ヒストリー研究に遅れて参入したとされるわが国の現状については、「日本では、労働史や女性史そして戦争の犠牲者に関する研究はあるけれども、オーラル・ヒストリーへの情熱は、学者の間でも民間の人々の間でも低かった」と述べられている。しかし、少なくともわが国の精神医療史に関しては、「聞き取り」という方法は欠かせないものだったのである(もちろん、柳田国男に代表されるわが国の民俗学における膨大な口承史の伝統も忘れることはできない、ポール・トンプソンは

知らなかっただろうが)。

ここからは、精神医療史に関わる「聞き取り」をめぐる筆者の経験を述べたい。そもそも「聞き取り」をする理由とは何だろうか。戦前戦後を通じて、精神病者処遇の日常的な様子を伝えるような文書記録(や写真・映像記録)はあまり残されていない。そのような記録は人々の記憶にしか残っていないことが多い。さらに「聞き取り」に付随して、かつて精神病治療に使われた器具、患者を収容していた建物、自然物(たとえば滝場の跡)といったものの調査は欠かせない。これらを一つのアーカイブズと考えて、そこから膨大な情報を引き出し、あるいは保存して、未来に継承していきたい。しかも、少なくとも戦前の精神病者処遇を目の当たりにした人はかなり高齢化し、これらの「近代遺産」の「聞き取り」を急がねばならない。また、使われなくなった器具や古い建物などは簡単に失われる可能性が高い。

では、筆者たちが行ってきた「聞き取り」のなかから4つの事例を挙げて、「聞き取り」がどのように行われたのか、その実際的なところを紹介したい。4つとは、静岡県の穂積神社、鹿児島県・奄美大島の私宅監置、宮城県の定義温泉(いずれも2006年)、および新潟県の永井精神病療院(2011年)の調査である。

静岡県の穂積神社は駿河湾を見下ろす竜爪山の尾根に位置している。上記の呉秀三・榎田五郎の1918年の論文に、この神社で行われていた精神病治療が登場する。それは、神主が毎日朝夕2回、神前に患者を伴い祈祷すること、この際に神殿の前に置かれた釜で湯を沸かし、湯の飛沫を患者の頭部に浴びせる(これを湯祈祷と称した)というものだった。神社には参籠所があり、精神病者が家族とともに自炊し、長期間滞在しながら治療をしていた。しかし、昭和初期には穂積神社での精神病治療は廃れ、戦後の神社は荒れ放題だったという。

現在、穂積神社はきれいに再建されているが、精神病治療を行っていた当時の名残はあるのだろうか。穂積神社調査のキーパーソンは、竜爪山の

ふもとにある平山地区の禅寺の元・住職で、郷土史家のOさんだった。Oさんによると、竜爪山の山腹での生活はなかなか厳しく、神主は昭和の初め頃にふもとの平山地区に移住した。それにともない、かつての穂積神社で行われていた精神病治療が、平山の神主の家で実施されるようになったという。寺から少し歩いて神主の家も見学した。長屋門や母家などが残されているが、いまは空き家になっている。近所の人の案内によれば、南北朝時代の武将・大森彦七の掛け軸の前に患者を立てて、湯祈禱をしていたという。

次は鹿児島県の奄美大島である。注目したきっかけは、鹿児島大学医学部の精神科教授・佐藤幹正が1955年に発表した論文「奄美地方復帰当時における精神病患者の処遇情況について」(『九州神経精神医学』第4巻)である。日本本土では1950年の精神衛生法により私宅監置は(1年間の猶予をもって)廃止となっていた。しかし、佐藤が調査をした1954年の時点では、政令により奄美の私宅監置はまだ合法だった。この論文で目を引くのは、私宅監置室の中で拘束されている患者の写真である。

もちろん、本土より私宅監置が合法である時代が数年長く続いたからといって、私宅監置室が残っているとは到底思えなかったが、せめて名残でもありはしないかと奄美大島に降り立ったのが2006年3月だった。奄美諸島でもっとも古い精神病院(1959年設立)の奄美病院のスタッフにあらかじめアポをとり、奄美と精神医学に関する一般的な話を伺った。しかし、私宅監置については現地に来てからインフォーマントを探した。一つのルートは、奄美病院のスタッフの親戚Kさんであり、彼に私宅監置の記憶を語ってもらった。Kさんには、かつて私宅監置室があったという場所にも案内してもらった。また、Kさん宅がある地区とは別の地区に古い集落があるというので、病院のスタッフにそこまで案内してもらった。が、あとは飛び込みで、Tさんのお宅で私宅監置の話をおうとともに、かつて患者の監置小屋があったという場所を教えてもらった。佐藤論文にあるように、当時の奄美の民家はとても小さく、集落か

ら離れた場所に監置小屋を作って患者を監置するケースも多かった。一方、Y村役場は、まったくの「飛び込み調査」だった。役場の保健福祉課の職員はわれわれ珍客をこころよく迎えてくれ、その人のアレンジで最終的には元・村長から私宅監置の生々しい話を聞くことができた。以上のいずれの場面でも、1955年の佐藤論文のコピーが大いに役に立った。「こんな監置室を知りませんか」と写真を見せて、話の糸口になったからである。

「聞き取り」は必ずしも歓迎されるわけではない。その意味で、「研究者泣かせ」で知られる宮城県・仙台近郊の定義温泉を紹介したい。この温泉は、精神病治療の温泉として有名で、1918年の呉秀三・樫田五郎の論文にも紹介されている。しかし、定義温泉でただ一軒の温泉宿を営んでいるIさんは、マスコミの取材はもちろん、研究者の見学もお断りというポリシーを貫いているという。いくつかの文献情報によれば、近年ここを見学できた研究者はいない。ともかく、筆者たちは、2006年7月に定義を訪れることにした。まずは、温泉の手前にある定義如来・西方寺で、定義という場所の由来などを聞き、さらに温泉の評判などの聞き込みを行った。かつての温泉の様子はある程度わかったが、最近の温泉のことは誰も知らないようだった。周辺での情報収集を終えて、定義如来のさらに奥にあるという定義温泉に向かった。あとから知ったことだが、温泉のある山全体がすべてIさんの家の敷地だという。過去の研究者は、温泉宿まで延々と歩いてたどりついたと書いているが、その途中の長い山道がすでに私有地内だったことになる。

しかし、筆者たちはその敷地内に到達する前に、偶然にも、とある農家の縁側で話しこむIさんに会うことができたが、やはり見学はできないということだった。ただし、「以前に旅行雑誌に紹介された温泉の記事があり、詳細はそれを見てくれたらいい」という。待ち合わせ時間に、待ち合わせ場所に現れたIさんから、その雑誌を見せてもらった。

最後は、新潟県加茂市鶴森にあった古い精神病院、永井精神病療院の調査である。1912年の呉

秀三の論文に紹介された時点では、わが国に存在する精神病院のなかで最も歴史があるとされていた。この病院の設立年代には諸説あるが、初代の永井慈現が寛政年間(1789年~1801年)に設立した鵜森狂疾院に遡るといわれている。呉秀三によれば、7代目慈現の時代の1894年に病院の設立が許可されたという。7代目慈現は養子を迎えて後継者としたが、その後継者は早世し、その子も耳鼻咽喉科に進んだことなどから、1922年ころまでに廃院となった。

病院は廃院となったが、病院の建物は近所のWさんが自宅として使っているということで、そのお宅を訪ねた。ただし、この建物はもとあった場所から少し移動している。かつて永井精神病療院があった場所は、現在は果樹園になっている。さらに、Wさんの案内で、鵜森地区内の郷土史家のMさんを訪ね、病院の歴史について話を聞いた。

「聞き取り」の事例は以上だが、これらを通して学んだ経験則をまとめたい。

まず、「聞き取り」にあたっては、当然ながら綿密な調査計画と事前調査は必要だが、聞き取りの現場で起こる予測不可能な展開に身を任せる柔軟性と行動力が求められる。最初のインフォーマントを起点に、別のインフォーマントへ、さらに別の……とつながっていくケースが多い。また、基本的にはインフォーマントとは一期一会を覚悟し、その時、その場で作業に集中したい。精神医

療史という点からは、現場に赴いて、かつての治療空間(たとえば神社仏閣や滝場)を体感することも、「聞き取り」の重要な要素であることを強調したい。

次に証言の内容に関しては、社会的な地位が比較的高い立場・役職にあるインフォーマントから得られる証言ほど、「公式的な見解」のせいかなんか文献から得られる情報と変わらず、陳腐なことが多い。また、証言の信頼性については、複数の人たちに「聞き取り」を行い、文献資料と突合せることによってかなりの水準を確保できると考えている。むしろ、文献資料からの情報と「聞き取り」で得た心証との違いは、新たな課題が生み出される契機となる。

さらに「聞き取り」は、インフォーマントに元気を与え、ひいてはその地域の活性化にもつながるという意味で、「社会的・对人的貢献」的な面も持っている。一方で、「聞き取り」現場での調査者・調査地被害には敏感でいたい。いずれにせよ、「聞き取り」で得られた成果をまとめ、プライバシーに配慮しつつ何らかの形で公表することで、インフォーマントやその地域社会にフィードバックを行うことは不可欠である。

最後に、精神医療史に限らず医学史全般、あるいは他の分野で、もっと「聞き取り」を駆使した研究が盛んになること、また、貴重な情報を持ちながらも、あえて言葉にすることもない「普通の人々」の声がもっとすくいあげられることを願う。